

伊藤製作所に入社

大学の卒業が近づいてきた。社会人になれば、好きなスポーツや遊びができなくなると思うと、やり残したことが次々と浮かんで消え、寂しさで不安でいっぱいになった。卒業後は先代が伊藤製作所に新たに金型を製作する部門を立ち上げていたので、金型の修行が出来る会社が良いと考え、金型と研磨機を製造する「日興機械」を志望した。

しかし首尾よく合格したものの、文科系出身ということから配属先は営業か経理だという。そこで私は金型製作部門への配属を懸命にお願いし、やっと了解をいただいた。日興機械は本社を横浜市に置く平面研削盤のトップ企業だった。当社が金型製作部門を設立

伊藤製作所社長

伊藤 澄夫 9



伊藤製作所入社当時の私

した際に、平面研削盤と成型研削盤3台を発注した関係で、当社の若手社員を3カ月余り指導してくれたほど親切な会社だった。

ところが卒業を1カ月後に控えた2月上旬、下宿宛に1通の速達が届いた。

そこには会社の業績悪化を理由に「会社更生法の手続きをしているので新入社員全員の採用を中止することとなった」という衝撃的な内容が書かれていた。時あたかも不景気で就職難と言われた時代のこと。大学の進路指導課は

た。時あたかも不景気で就職難と言われた時代のこと。大学の進路指導課は

技術者目指して再入学

休止しており、職を探すことなど全く不可能だった。

かくして私の就職先は心ならずも、親父の経営する伊藤製作所に決まったのだ。古参社員から、「京都からボンボンが帰ってきた」などと思われるのが嫌で、どこかの会社で修業を兼ねて就職したかったのだが、それまでできなかった

た。そこで入社前に名古屋工業大の機械科に通っていた、いとこの長田耕一に自宅に泊まってもらい2カ月間、数学や物理の勉強に励んだ。その結果4月に名城大学理工学部機械工学科一部(夜間)の2年生編入試験に運よく合格した。「これで技術者になれるぞ。一人息子のボンボンとは言わせないぞ」と思ったものだ。

毎日、午後5時に仕事を終え、名古屋市中村区にある学舎で学び、深夜0時に帰宅という日々が続いた。近所の人たちは「伊藤の息子は遊び人」と思っていたようだ。結局仕事が忙しくなったこともあって、4年生の9月に退学することとなったが、実は大学には金型の文献や教科書など何一つなかった。根性を鍛えられたことが収穫だったと諦めている。